

1911(明治44)年に創立された、財団法人日本体育協会(当時は大日本体育協会)は、この7月で100周年を迎える。その記念事業のひとつとして『日本体育協会百年史』が刊行されるといえるが、私は懸念している。手元にある前回の75年史が、あまりにも安直な内容だからだ。

たとえば、日本スポーツ界の「恥部」で、政治力に屈してボイコットをしてしまった31年前のモスクワ・オリンピックについて、たったの3ページで片している。その大半は涙を飲んだ代表選手の名前を羅列しているだけで、肝心のボイコット表明までの経緯は書き込まれていない。

まだある。冒頭の8ページに亘る「本会の創立」の項に関しても内容が安易。近代スポーツの夜明けを迎えた、明治時代のスポーツ事情の詳細も記述されず、かろうじて「お雇い外国人」たちがスポーツを伝えたことだけは記されている。しかし、彼らがどのような思想で、いかなる目的を持って日本にスポーツを紹介したのか、などについては言及されていない。

要するに、75年史では単に「スポーツの流れ」を記しているだけである。もちろん、当時の明治政府が打ち出していたスポーツ政策や、国民の関心などについてもほとんど記述されず、さらに残念なことは、「ある人物」についてまったく触れられていないことだ。

ある人物とは、お雇い外国人の中でもっとも日本に貢献した、あの『ベルツの日記』でも知られている、ドイツ人医師のエルヴィン・フォン・ベルツだ。約30年間に亘り、明治政府の要人たちに「スポーツの医学的効用」を説いた。「健康」と「体育」の意義を講義、論文、講演などで国民に訴え、スポーツを奨励。とくに将来を担う青少年

吹き抜ける。金沢の空模様は「弁当忘れても傘忘れるな」の格言通り、瞬時に変わるという。3月下旬、JR金沢駅前から金沢大学角間キャンパス行のバスに乗って約45分。金沢大学留学生センター教授、ドイツ人のハイコ・ビットマンさん(1964年昭和39年生まれ)の研究室を訪ねた。紅茶を勧めながら彼は、

連載 スポーツ「新・職人」賛歌

## 様々な武道に挑戦するハイコ・ビットマン

金沢大学留学生センター教授

## ドイツ人研究者

## 明治のお雇い外国人

## 「ベルツ」を語る

ルポライター

岡 邦行



159

年にスポーツを推奨しつつ、日本の伝統的武術に着目し、柔術を「身体を鍛錬する方法の中で、最上のものである」と評価し、自ら剣術と弓術を実践していたのだ……。

私の前に苦笑しつついった。「僕について岡さんは、メールで『平成のベルツ』などと表現していますが、それはもうね、過大評価もいところですよ。ベルツの功績はあまりにも偉大ですからね」

たしかにそうかもしれない。しかし、初来日から、2年間の帰国をはさんで今年で19年目。10年前から留学生セン

ターで教鞭を執っているビットマンさんは、日本武道の空手道や杖道などを指導する一方、日本文化の陶芸、金箔、能楽、座禅などの現場に留学生を引率し、研修に立ち会う。さらに、留学生の日本での生活のサポート役までこなす。その他、主に日本人学生にはドイツ語と武術を指導する。もちろん、自ら武術を実践し、その腕前は空手道3段、居合道6段、杖道5段。沖縄の三線にも励んでいたことがあるという。

いうまでもなく、学者として研究にも情熱を注いでいる。空手道を博士論文のテーマに選び、12年前にドイツで文学博士となり、同年に『空手道』を出版。そして、昨年は長年の夢だったベルツを追究した『エルヴィン・フォン・ベルツと身体修練』をドイツ語と日本語で出版した(ともにハイコ・ビットマン書房刊)。これまで知ることができなかった新事実を加え、新たなベルツ像を浮き彫りにしている。

「僕はシュツットガルトで生まれたんですが、育ったのはルードヴィヒスブルグ。その町から北に10キロくらいのところ、ベルツの故郷であるピーティヒハイムがあるんですね。だから少年時代からベルツの名前は知っていた。たぶん、僕自身が日本に興味を抱いていたため、自然とベルツに着目したんでしょう。日本語を勉強すると、必ずベルツが出てきますからね」

そう語るビットマンさんは、ベルツ